

環境教育のカリキュラムの作成

ねらい・目的



環境に関する学習に全く取り組んでいない学校はない。教師や生徒が意図しなくとも、各学校では、すべての教科で環境に関わる学習が行われている。しかし、すべての学校で計画的かつ体系的に学習を進められているわけではない。

環境に関する自然科学や社会科学的な基礎知識は、主に社会科や理科、技術・家庭科、保健体育科などの学習を通して習得する。生徒がどの時期に、どのような内容を学習しているのかを整理することで、自校での環境教育への取り組みの見通しが立てやすくなる。

取り組みの背景として



環境に関することは、各教科などさまざまな場面で取り上げられています。

しかし

関連をもたせたり系統だったりしていないため、生徒が深く考えたり、体感する場面が十分ではありません。

だから

環境行動につながる環境教育を進めるために、各教科などの内容を整理し、学習を深めたり体験したりする場を考えカリキュラムの整備を行うことで、生徒が考えたり体感する場を創出する機会を増やすことができます。

取り組み項目(実施方法)



取り組み1 自校の目指す環境教育としてのねらいを設定する

取り組み2 環境教育のねらいにつながる単元を各学年・教科から選び出す

取り組み3 環境教育を進めるうえで、生かせる施設・資料等を確認する

取り組み4 各教科等で扱われている題材を整理する

- 各教科で扱われている環境に関する学習について、時期、内容、時間数を確認する。
- 教科としての目標を確認し、環境教育のねらいと比較する。

取り組み5 環境教育のねらいを達成するため、各教科内でどのようなねらいでどのような学習内容についてどれくらいの時間で体験的に学習するかを計画する

取り組み6 これまで取り組んできた生徒会活動や学校行事などの特別活動や地域と連携した活動について環境の側面を付加する

取り組み7 環境教育の指導計画として整理するとともに、指導計画・実践の評価を行い必要に応じて更新していく

取り組み効果



効果 1 学びが関連をもって生徒の身につく

各教科等での取り組みに関連をもたせることで、生徒の学習が深まり、関連づけて考えることができるようになる。

効果 2 学校全体で環境行動を見直す契機となる

各教科等の学習が、学校の中の環境について考える契機となり、校内生活での環境行動を契機に、日常生活の中で継続した環境行動の実践へとつながっていく。

効果 3 計画的、継続的に環境教育を進めることができる

各教育活動で取り組まれている環境学習の内容が、教科等を横断した指導計画をつくることで、より計画的に取り組まれるようになる。また、1年間を通して継続した取り組みとなるとともに学年を横断した学習のまとまりとなる。

他のプログラムとのつながり



■Sapporo エコライフ実践校の取り組み（中学・高校編）

環境 ISO を含め、全校的な環境配慮の取り組みを推進する。